慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	紀州と福沢諭吉
Sub Title	Kishu (紀州) Province and Fukuzawa Yukichi (福沢諭吉)
Author	会田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.1/2 (1970. 5) ,p.331- 350
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	今宮新先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0335

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紀州と福沢諭吉

会田倉吉

一

慶応義塾では古く、義塾の「三藩」または「四藩」ということがいわれていたと伝えられる。主として維新前後から明治初年にかけ、塾内に勢力のあった代表的な数藩を称したもので、まず入学者の多かったこと、しかもそのなかから人材が輩出して、塾内における中心的存在となったものが少なくなかったことなどによる評判の藩というわけであろう。そして、この「三藩」ないし「四藩」にあげられているのは、中津・和歌山・長岡と、のちに鹿児島がこれに加えられて、そう呼ばれたようである。

たとえば、石河幹明著『福沢諭吉伝』第一巻を見ると、「鉄砲洲より新銭座にかけての塾生には中津、和歌山、長岡の三藩人が特に多かった。」(六三六頁)とか、「三田の時代になってから塾内では右の三藩人は義塾の藩閥であるなど評した者もあった。当時塾の教職員の幹部に三藩人の多かったのは事実であって、要するに三藩人は早くから入塾して従って其幹部にも多数を占むることとなった次第である。」(六三七頁)とか述べられており、また『慶応義塾五十年史』は、その「明治十年西南戦争当時の義塾」なる項に、「生徒は重に和歌山、中津、長岡及び鹿児島の四藩出身にして、塾生の総数

約三百名の内、二百名の多数を占めたり。」（一四四頁）ともしるしている。もって、概況をうかがい得よう。

ちなみに、右に「鉄砲洲」「新銭座」「三田」などとあるのは、慶応義塾の所在していた場所の地名であって、それにより義塾がそこにあった年代を表現したもので、すなわち慶応義塾は安政五年（一八五八）創設の当初は築地の鉄砲洲に開塾し、三年後の文久元年（一八六一）にいったん芝の新銭座にうつって、同三年には再び鉄砲洲にもどり、維新に際し重ねて新銭座に新校地を求め、新たに塾舎を建てて移転したのであった。つまり、開設以来十年の間に鉄砲洲と新銭座とに二度ずついたことになるわけで、ここにいう「鉄砲洲」「新銭座」は、どちらかといえば、いずれも二度目の時期をさすものとみてよかろう。ことに、二度目の新銭座移転は慶応四年（一八六八）のことで、「慶応義塾」の塾名は実にこの移転にあたり、時の年号をとって命名されたのである。それから、この年は九月に改元されて明治元年となり、同四年（一八七一）にいたって義塾はさらに芝の三田に転じた。現在の所在地がこれである。

さて、こうしてみると、慶応義塾の初期における和歌山（紀州）藩と義塾との関係がいかに深かったかが容易に察しられよう。そこで、まず当時の同藩からの入学者の状況につき、もうすこし詳述してみよう。

明治十六年（一八八三）四月に、義塾の創立者福沢諭吉がみずからしたためて印行した『慶応義塾紀事』なる小冊子がある。創設以来二十五年間の沿革を、「履歴之事」「学規之事」「会計之事」等に大別して要領よくまとめた略史といってよいと思うが、この末尾に「慶応義塾入社生徒年表」および「慶応義塾入社生徒国分表」と題する二つの表が添付されている。両表とも文久三年（一八六三）から明治十五年（一八八二）におよぶ二十年間の統計で、それ以前のことは記録がなくてわからないのである。ところで、右の表によると、この二十年間に義塾に入社（学）した生徒の総数は三千九百六十七名に達し、それを地方別に示してみると、

東海道	一一四三	西海道	七五〇	東山道	六〇七
南海道	五〇二				

山陽道　三五二　北陸道　三一七　五畿内　一三四　山陰道　一二四
北海道　二九　朝鮮国　六

となり、その南海道の分の国別順位は次のとおりで、紀州が最上位にある。

紀伊　一七八　土佐　一三七　伊予　九四　阿波　五五
讃岐　二二　淡路　一六

のみならず、紀州のこの百七十八名という数は他の地方の諸国にくらべても抜群といえる。かりにいま、右表から百名以上の入学者を出している国々を取り上げると左の八カ国で、第一位の武蔵を除けば紀伊が筆頭になるのである。武蔵は地元の江戸を含み、あるいは諸藩の江戸詰のものたちもこれに入れられているかも知れないので、むしろ別格といってもよかろう。

武蔵　五五一　紀伊　一七八　薩摩　一六七　豊前　一五九
越後　一五七　肥前　一五〇　土佐　一三七　肥後　一〇六

しかも、特に旧幕時代に限って、これを入社帳（入学者名簿）に実際にあたってみると、入学者総数二百六十一名のうち、ちょうど一割に相当する二十六名までを和歌山藩士が占め、わけても、慶応二年（一八六六）末には十名もがそろって入学している。左に、それらの氏名を入社帳の記載順に列記しておこう。括弧内は入学年月日である。

臼杵鉄太郎（元治元年九月六日）、武内八兵衛（元治二年三月）、疋田伴之進（慶応元年閏五月六日）、臼杵隆吉（慶応元年十月八日）、松山棟庵（慶応二年十一月）、西山乾（慶応二年十月）、広井智吉、小川駒橘、和田与四郎（義郎）、小杉恒太郎、辻邨得一、畑上徳太郎、小泉信吉、草郷清四郎（以上八名、慶応二年十一月二十八日。ただし、初期の部分は入社帳が二種あって、一種にはこの日付の入学者に内田今三郎がもう一名記載されているが、整理した方のものには省かれている。）、三毛禎吉（慶応三年二月十

八日）、堀田鉉吉（慶応三年二月二十五日）、近藤徳太郎、南部民二郎（以上二名、慶応三年二月十二日）、坂西八郎、水上装蔵（以上二名、慶応三年二月二十八日）、田中直吉（慶応三年三月二十一日）、吉田政之亟（慶応三年四月十日）、竹内文太郎、田中省三郎（以上二名、慶応三年四月十六日）、津田二郎（慶応三年五月十六日）、鈴木主膳（慶応三年十月二十三日）

けだし、このように、紀州藩から比較的におおぜいの入学者があった事実は当然、同藩が義塾内におのずから一つの勢力をなす要因となったことであろう。

二

明治以前における慶応義塾の塾舎は、もとよりそれほど大きな規模ではなかった。開塾当初は中津藩奥平家の中屋敷の長屋の一軒から出発し、前期新銭座時代には独立の二階建家屋とはいいながら、まだ一、二階あわせてもたかだか二十畳ぐらいのものといわれ、後期鉄砲洲時代になってようやく五軒つづきの長屋一棟を借り受けることが出来たけれども、学生数の方も次第に増加しているので、つねに手狭をかこっていたのである。（それらの塾舎の模様については、『福沢諭吉伝』第一巻、二二六、二二八、三〇二、四一九―四二〇頁等に掲載の、往年の在塾生たちの懐旧談その他を参照せられたい。）

したがって、右にしるしたごとく、慶応二年（一八六六）末に紀州藩一藩から一度に八名ないし十名もが入学してくるとなると、これを収容するのは決して容易ではなかったであろう。そのために、このときは邸内に特別に一棟の塾舎を設けて事を弁じたということで、その建物を「紀州塾」と呼んだらしい。それについて、『慶応義塾七十五年史』はこうしるしている。

又慶応二年の冬頃紀州から一時に多数の学生が入塾することになり、従来の塾舎が狭隘でこれを収容しきれなかったので、紀州藩では奥平藩邸内に別に一棟の塾舎を建築し同藩の学生を此処に寄宿せしめることになり、邸内では俗に

これを紀州塾と称してゐたが、必ずしも紀州の学生のみに限ったわけではなく、空席があれば他藩の学生をも収容したのである。（九頁）

また、この紀州塾の規模と位置とについては、小川駒橘の記憶にもとづく図面が、『慶応義塾五十年史』（三三頁）に載っていて、敷地のいちばん奥のところに、「紀州塾新築」として正方形の枠のなかに「二十坪程」と書きこまれた部分が見られる。小川駒橘は前述のとおり、このとき紀州藩から入学してきたもののひとりで、もと同藩の長屋専之丞の三男に生まれたが、小川家の養子となり、その嗣子が小川琢治であって、湯川秀樹は孫にあたる。駒橘は成業ののち義塾の教員を一時つとめ、その後、久居藩の英学校教師、文部省翻訳課出仕、内務省戸籍御雇、長崎師範学校長等を経て、横浜正金銀行に勤務したもので（『慶応義塾出身名流列伝』二二五―六頁参照）、この人の記憶による右の図画は、『福沢諭吉伝』第一巻（四二〇頁）、『慶応義塾七十五年史』（八頁）、『慶応義塾百年史』上巻（二〇九頁）等にもそのまま掲載されている。

ただ、『慶応義塾百年史』上巻（二一〇頁）だけには、この紀州塾を「二階建」としるしてあるが、典拠は詳らかにされていない。それから、同塾完成の時期についても、同書は、前記の小川たち八名が入学してきた「慶応二年十一月二十八日にはすでに紀州塾は完成していたものといえる。」（二二頁）としているが、それはともかくとしても、なぜ紀州塾なるものがこのように建てられたかの事由については、これも次のとおり必ずしも明確にはされていない。

このころの塾舎の状況からみて、実際に一時に八―十名の入塾生を収容することは困難であったろうと思われる。それならばなぜ紀州塾が奥平家の中屋敷に建築されたのであろうか。いかに紀州藩といえども、他藩の屋敷中に、学生の寄宿舎とはいえ、建造物を作るということは考えられないことである。したがって、このいわゆる紀州塾は、実際は紀州藩から出資されて建造されたものであろうが、手続上は福沢が中津藩に交渉して、福沢塾の拡大といった意味で許可をとったものと考えねばならない。福沢と紀州藩との間がいかなる話合いになっていたのか、この関係は今

日のところ全く不明である。しかし福沢と紀州藩との深い関係は、福沢が紀州藩の有力者津田出、田中善蔵、浜口梧陵および緒方塾の同窓山口良蔵らと相当深い関係をもっていたことからも十分に考えられる。（同書、二一〇―二一一頁）

しかし、いずれにしても、このような事実は慶応義塾なり福沢なりと紀州藩との関係のかなり深いものであったことを推測させるにあまりがあるといわねばなるまい。そのうえ、これとほとんど前後して、紀州藩は福沢に藩金を托し左記のごとく原書の購入をはかってもいるのである。それらを思えば、紀州藩からの入学者が急に多くなったというのは、いわば結果であって、むしろそれに先だち、福沢なり慶応義塾なりと紀州藩との間になにかきわめて緊密な関係が存したことがいよいよ察せられるものといってよかろう。

福沢諭吉は慶応三年（一八六七）早々にアメリカへ旅立っているのであるが、『慶応義塾五十史』によると、そのとき、まだ入学したばかりの「和歌山藩より入塾し居りし凡そ十名程の生徒の如きは、藩金二百円許りの融通を乞ひ、之を先生に托して書物を買入れたりと云ふ。」（三六頁）とある。当時の二百円といえば相当な額であるから、十名ほどの新入生がそう手軽に出せるとも思えないし、これはたしかに藩金に違いあるまい。現に、それらの購入原書は、福沢がこの旅行中に不都合のかどがあったということで、帰朝後しばらく謹慎を申し付けられることになって、他の品々もろとも差し押えられるにいたったが、その際福沢から紀州藩の関係者に対して釈明をしている書簡がのこっていて、いっそうはっきりそのことをうかがい知られるのである。

一つは慶応三年九月七日付の山口良蔵宛で、謹慎を命ぜられるに及んだ事情や謹慎中の様子を報じたあとに、「右は兼ねて御頼みの書籍、余り延引相成候に付、事の大略を一と通り申述、御断迄申上候。実は御同様災難に罹候義致方無之、今しばらく御猶予可被下、まさか右荷物をまるで奪却いたし候者も有之まじく存候。」（『福沢諭吉全集』第十七巻、四二頁）と

したためられ、もう一つ、同年十月二十六日付の井上従吾右衛門宛には、こうある。

（前略）、扨其節内々御話申上候荷物の一条、今日も尚承候処、小野友五郎義明後廿八日京師へ出立も可致哉の由、若し同人出立いたし候ては、留主中、事の理非曲直は姑く舎き、何事も留主にて不相分と申場合相成、到底落着致間敷哉、甚心配仕候間、如何にも御手数の段恐入候得共、是非共同人在府中に否の義相分候様仕度、若し又亜行中私に罪状も有之候はゞ、甘じて其罪に伏し可申、荷物に罪は有之間敷、罪の有無に拘らず、一応の挨拶も不致、他人所有の品を取押候義、士官たる者の可致処置に無之、旁以て昨今の中、友五郎出立不致前に黒白相弁じ、御屋形の御書籍は勿論、序を以て私日用の品物までも取返し申度候。何分にも宜敷御周旋奉願候。云々（同書、四三―四頁）

この一件に関し、福沢がいかに困惑し奔走していたかがしのばれよう。宛名の山口良蔵はかつての緒方洪庵の適塾における学友で、このころはちょうど紀州藩に雇われていたものであり、井上従吾右衛門は同藩の有力者で、当時は公用人のようなことをしていたという。井上宛の書簡に見られる小野友五郎はこのときのアメリカ行に際しての上司で、その申立てによって福沢は謹慎させられ、七月中旬から十月まで出勤をひかえていたのであった。

なお、このとき購入の書籍は結局、奔走の結果、翌年（一八六八）になってようやく無事に引き渡されたようであるが、『福沢諭吉伝』第一巻にも、「紀州藩から頼まれて買って来た原書は何部であったかわからぬけれども、藩の入用とあれば少ならぬ部数であったらうと思ふ。」（五一八頁）とあるとおり、どのくらいの部数であったかは定かでないし、内容についてもあまり明らかではない。それでも、こういう事実があったことについては、十分に留意されてしかるべきでなければなるまい。福沢がこのときアメリカから買って帰った書籍は「茶箱のやうな大きな箱が八つか九つ」とか（三輪光五郎の談話、『福沢諭吉伝』第一巻、五一一頁）、あるいは「書物箱のみにても十二箱の多きに達」したと伝えられ（『慶応義塾五十年史』、三六頁）、そのなかに紀州藩から頼まれたものも含まれていたのであろう。

こうして考えてくると、どうしても紀州藩と福沢および慶応義塾との、かなり緊密な関係が想定されざるを得ないわけであるが、『慶応義塾百年史』では前述のとおり、「紀州藩の有力者津田出、田中善蔵、浜口梧陵および緒方塾の同窓山口良蔵」らと福沢との関係からそれが察しられるとしているのである。

三

慶応二年（一八六六）末の入学者組のひとり草郷清四郎の語るところによれば（高橋義雄編『福沢先生を語る諸名士の直話』所収「草郷清四郎直話」）、紀州藩では維新前、家老頭の津田出が大いに陸軍の改革に尽力し、田中善蔵は儒者ではあったが、翻訳書によって西洋の事情を研究した進歩派で、津田のうしろだてとなり、しきりに人材養成をはかっていたところ、たまたま山口良蔵が紀州藩に雇われるに及び、この山口が右の田中その他と協議して、福沢を紀州藩のお抱えにしようとしたことがあるという。「そこで福沢先生の如き者を、紀州に連れて行くことは出来ぬから、六千石の禄で、客分として身は東京に居って、顧問役をすると云ふやうな条件で、先生を紀州に雇入れると云ふ相談が成立した」（同書、一六六頁）のであったが、田中が紀州で暗殺されてそれは見合わせになってしまったというのである。

もっとも、紀州藩が福沢を抱えようとして果たさなかった顚末については、下村宏著『南紀人材論』にも「紀州に於ける福沢諭吉翁招聘談」として、おもしろいはなしが載っている。参考に一部を紹介しておこう。

木下友三郎君から聞いた話で、聞き誤りも多いと思ふが、如何にも面白くもあり又残念に感じた事である。

それは紀藩に福沢翁を聘せんとした時に福沢翁の言ふ所が面白い。

「成程私も雇はれよう。然かしそれは一つの註文がある。註文があると云ふのは、どうしても之からは先進国の文化を研究して之を我国に移し植ゑなければならぬ。処が福沢諭吉只一人では不十分であり、又自分も日進月歩の文

明には遅れて行くのである。故に自分を雇ふと同時に又幾十幾百の福沢を造ていって貰はねばならぬ、それには年々有望なる青年を百人位？宛洋行させて貰ひ度い」（三九二―三頁）

そして、そのための費用は月におよそ二百円ぐらいを必要とし、それも、かりに百人洋行させたからといって、人物というものはそのうち一人でるか二人でるかわからないものだということで、それで話はそれなりになってしまったと。はたしてどこまで真を伝えるものか、詳らかではない。

また、やはり紀州藩の出身で、明治七年（一八七四）四月二十七日に慶応義塾に入学し、後年は二十四年あまりの長期にわたって塾長をつとめた鎌田栄吉の談話（『鎌田栄吉全集』第一巻所収「自伝を語る」）によると、六千石で福沢を紀州に招こうとしたのは同地の共立学舎についてであって、そのとき福沢は自分では行けないからとて紀州出身の松山棟庵をおくり、同じく吉川泰次郎が助教となって行ったといっており（同書、一四一頁）、前記の草郷のはなしや下村のしるすところと、この言との関係がはっきりしない。

しかし、それはともかく、右の草郷のはなしでは、「さう云ふ次第で、紀州と先生との間は、山口良蔵が媒介者」であったと断じ、「詰り福沢先生と紀州との関係は、先生に次いで緒方の塾長たりし山口良蔵が、紀州の抱へとなって、先生と紀州との間を連絡したのが大原因であります」（前掲書、一六頁）と論じられている。けだし、『慶応義塾百年史』上巻の前掲の記述などはおおかた草郷のこの直話あたりに由っているのではなかろうか。浜口梧陵との関係については次項に述べる。

さらに、このような関係を『福沢諭吉伝』第一巻についても見ると、左のようにしるされている。

松山（注、棟庵）は紀州高野山の寺領安楽川（あらかは）荘の医者で和歌山に開業してゐたが、更に医学修業の志を起して江戸に出る途中、船中で懇意になった山口良蔵の勧告に依って先生の門に入ることゝなった。山口は大阪の医者で緒方塾に学

び、先生が江戸に出た後に其塾長となり、先生とは最も昵懇であって、江戸に来るときは常に先生の家に宿し、鉄砲洲新銭座は勿論、三田に移った後も度々来てゐたが、其時山口は紀州藩に雇はれてゐたのである。松山の入塾と殆んど同時に紀州から和田義郎、小泉信吉、草郷清四郎、小川駒橘、小杉恒太郎其他五六名が出府入塾した。これは藩の有力者であった岸嘉一郎が藩士の少年中から選抜して連れ来り、先生に托したものである。此頃は入学者が多くて、さなきだに塾舎は満員であるところへ紀州から多数の学生が来て到底収容が出来ないので、紀州藩では奥平邸内の塾の側に一棟の長屋を建築し同藩の学生を此処に寄宿せしむることにした。（四三一―二頁）

しかも、ここにあげられる岸嘉一郎とても実は、「紀州は前編に記した通り藩の有力者岸嘉一郎が先生の学友山口良蔵と協議し、優秀の子弟を選抜して鉄砲洲に入学せしめたのを始とし、藩に於ても引続き留学生を出した」（同書、六三六頁）次第なので、山口は公私ともに同藩の子弟を福沢の塾へおくることに尽力していることになろう。つまり、紀州藩と福沢との関係は福沢の親友山口良蔵を通じて結ばれ、紀州藩がしきりに進取的政策をとっていた折から互いに相寄り、いよいよ関係を深めるにいたったものといえるのである。その意味で、紀州藩としても福沢に知己を得たことはきわめて幸運であったろうし、福沢としてもこのような有力な藩との結びつきを持って、その意とするところを少しでも実現できることには相応に心を動かされたに違いない。もちろん、福沢個人にすれば、特に紀州藩だけをえらんで、このような関係をのぞんだとは限るまいが、たまたま山口を媒介として紀州藩との格別な関係をもつにいたったものであろう。

その山口良蔵に宛てた明治元年（慶応四年）閏四月十日付の福沢書簡を見ると、紀州藩からの塾生の動静を報ずるとともに、ますます藩中の青少年たちをはげまして江戸に勉学に出すようすすめている次の一文がある。

尊藩の人にて在塾の面々は、当時、松山、小泉、草郷、辻村、小川、吉田、六名なり。松山の上達は格別、小泉抔も頼母しき品物、一両年の内には一人物たる事請合なり。独怪しむ、御国許には少年才子幾人も可有之、方今其人々は

何を致し居候哉。此時節に当り筋力もなき弱武士を軍に出すとも、殿様の御徳用にも相成間敷、又一方より論ずれば、当人にても行々世禄の丸潰れたるべきは天下一般必然の勢にて遁るべからず、其時に至りツブシ地金のねうちなくば飢寒を免かれざるべし。何卒有志の筋え御相談、少年を鼓舞して出府御取計被成度存候。（『福沢諭吉全集』第十七巻、五二頁）

松山以下六名の塾生とはいうまでもなく第一項にかかげた慶応二年末から同三年初にかけての入学者たちである。

そのほか、明治元年（慶応四年）六月七日付書簡には維新の変乱による文運の衰退をなげきながら、「然ども国の為めに謀て爰に一策なきにあらず」とし、「独睹の見を以て独り文事を盛に行ひ、世の形勢如何を問はず専ら執行可致と存候。数年を出ずして必ず国家の為め鴻益を奏すべし。」と述べて、「其費用の如きは一年一人え六、七十両も与へて十分なり。百人の生徒を支るに七千両に過ぎず。彼万を以て計る大金を投じ、外商の古船を買てこれを乗潰し、小銃を買てこれに錆を生ぜしむるに比すれば、其利害得失同年の論にあらず。世人何を以てこゝに注意せざるや。同志の人物え御話し被下度候。」（同書、五五―六頁）といいおくっている。

そればかりか、同じく十二月八日付には「此節尊藩の景況如何。嘸〳〵尊兄にも御用多の義奉察候。先日松山義帰国、委細当所の模様御聞取被下度候。慶応義塾も追〳〵繁昌、読書商売誠に安気に御座候。何卒紀州藩も二十歳以下の若年輩を追出し洋学執行可然奉存候。」（同書、六一頁）ともある。

もって、福沢の考えが明らかにうかがえよう。あえて紀州藩のみに止まらず、福沢の意中には日本の将来がつねにあったのである。ただ、福沢は決して空理空論を大言壮話するものではない。手近なところから着実にそれが実践をはかっている。要するに、紀州藩へのこのようなはたらきかけも、いわばその一例にほかならず、同藩がまたそれにこたえるだけの器量を存分に有していたものと考えてのこととというべきであろう。その結果、多くの人材が養成されて、同時に、それ

がおのずから慶応義塾における大きな勢力となったことも、たしかに当然でなければなるまい。

四

入学者の多かったことについで、教職員の幹部を少なからず出していることがまた、和歌山藩の慶応義塾における勢力を形づくる要因をなしたであろうことについては、『福沢諭吉伝』による指摘をすでに第一項に紹介しておいた。それをいま現実にあたってみると、後期新銭座時代の教員として伝えられる三十五名（『慶応義塾五十年史』、四五八頁）のうち、紀州藩の出身者は実に、松山棟庵、小泉信吉、小川駒橘、和田義郎、小杉恒太郎、吉川泰次郎の六名にのぼる。それも、吉川だけは入社帳に記載洩れになっているが、他はいずれも既述のとおり慶応二年末の入学者なのである。

したがって、このような点が、紀州藩そのものの積極的な政策や、福沢の側からの勧奨などと相まって、いっそう同藩と慶応義塾との関係を密接にしたことも否めまい。現に、先述の明治元年十二月八日付山口良蔵宛福沢書簡のはじめの部分に「先達より紀洲[州]の書生連再び東遊」云々（前掲書、六〇頁）とあるように、明治になってからも紀州藩からの義塾入学者は引きつづき多く、明治元年（一八六八）から同四年（一八七一）の廃藩置県までに、はっきりしている限りでも左のごとく藩士三十一名、ほか三名が入学しており、同藩の支藩ながら慶応四年（明治元年、一八六八）以降独立の藩として認められた新宮藩からも、藩主水野忠幹の弟である石夫をはじめ藩士七名、ほか一名が入学しているのである。

稲葉犀五郎（明治元年十月二十一日）、伊達安一郎、伊達七郎（以上兄弟）、雄川司木生、瀬本長之助（以上四名、明治元年十月二十二日）、後藤保一郎（明治元年十月二十三日）、林良蔵、野口英之進、村井重熊（以上三名、明治二年二月二十日、いずれも小泉信吉が証人）、太田九蔵、西村祐之助、野田久六郎（以上三名、明治二年三月十一日、これも三名とも小泉信吉が証人）、松阪卜斉、森下岩楠（以上二名、明治三年二月六日）、大橋淡（明治三年二月二十一日）、森下栄吉、金谷熊四郎（以上二名、明治

三年三月九日)、西尾吉太郎(明治三年三月十三日)、菅野洋、渡辺恒吉、村井藤十郎(信晴)(以上三名、明治三年七月一日)、小浦鏟三郎(明治三年十月十六日)、三輪種寿郎(明治三年十月十七日)、竹田達三(明治三年閏十月十一日)、小杉俊二(次)郎、平井勝次郎(以上二名、明治三年閏十月十三日)、栗原覚治郎(明治三年閏十月十七日)、小泉芳五郎(明治四年二月二十五日)、村田次郎九郎(明治四年二月二十七日)、小杉轍三郎(明治四年三月二十日)、中嶋隆(明治四年三月二十七日、吉田政之亟が証人)、ほかに長瀬百太郎(明治三年三月二日)、野田益十郎(明治四年三月十八日)、巽清之亟(明治四年八月十八日)

新宮藩からの入学者　坪井仙次郎(明治三年二月二十四日)、水野石夫、鳥山溟滓(以上二名、明治四年二月二十七日、水野は和田義郎、鳥山は坪井仙次郎が証人)、関守児、中川八郎(以上二名、明治四年五月十三日、いずれも坪井仙次郎が証人)、飯田五郎太(明治四年七月三日、坪井仙次郎が証人)、田中準造(明治四年七月十三日)、ほかに野田従吾(明治四年三月二十一日)

他方、この間に、福沢を紀州へ招聘するはなしがもちあがり、松山棟庵や浜口儀兵衛の運動で、和歌山に設立された英学校へ福沢を呼ぼうという計画がたてられた。明治二年(一八六九)のことで、前項にかかげた福沢招聘のはなしには、これとの間にいささか混同が感じられないではないが、こんどのことについては、たしかにそれに関係のある福沢書簡が二通、『福沢諭吉全集』第十七巻に載っている。二月二日付の松山棟庵宛と二月二十日付の浜口儀兵衛宛とがそれで、それぞれに次のような文面が見られるのである。

松山宛のものの末尾の一文——

> 将又小生義御国へ可罷出旨被仰下、い才御書面の意味拝承いたし候得共、前段申上候通りの次第、何も大仕掛の仕事にも有之間敷、且又小生罷出候とも別段名案名工夫もあるべきにあらず、今一ケ条の差支は、例の Heavenly Court なり。既に昨十一月も御承知の通り天命アマ降り、其後当正月又候内々御沙汰あり、人情フラレタ高尾に熱くなるの理歟、頻にゴタ〳〵其話有之、大に恐縮仕候。依て伊達五郎君(注、陸奥宗光の父の養子で、紀州藩の公用人であったが、

このときは明治政府に出仕していたという。）へ托し、百口を煩し先づ鎮火に相成候次第、然るを又今紀州抔へ這出し候はゞ、ソリヤコソコイツはと如何様の事件可差起も難計、深く心配仕候。当処へ居ながらの義に候得ば、此の度の一条に付小生の力のあらん限り何にても御相談可仕、御役に立つことならば御助力も可仕、道の為実に欣喜罷在候得共、南行の義は前段の事情御察し被下度、全く夫れのみ、外に差支は無御座候。（六五頁）

浜口宛のものの一部――

扨此度は松山氏よりの縷々の文通、御企の一条委細拝承、乍蔭欣喜の至りに奉存候。就ては小生南行の義被仰下恐縮の次第に御座候。巨細の事情は松山氏へ返書差出置候間御承知被下度奉存候。何卒此度の御盛挙は必ず御成功相成候様いたし度、兎角人に知識乏しく候ては、不羈独立の何物たるを知らず。一身の独立をも知らざる者を相手に為し、何ぞ天下の独立を談ずべけんや。方今の急務、先づ文明開化抔の話は姑く擱き、人民知識の端を開き候義と奉存候。（六六頁）

松山は既述のごとく慶応二年（一八六六）末、山口良蔵のすすめで慶応義塾に入学し、翌三年九月七日付の山口宛福沢書簡にすでに「松山生頻に勉強にて余程上達、何よりの事に御座候。一両年を不出して一個の英学者に可相成存候。」（前掲書、四二頁）と報じられいるとおり、たちまちに成業して明治元年（一八六八）には紀州に帰り教育のことにしたがっていたわけで、藩の少参事浜口儀兵衛とはかって英学校共立学舎を設立し、資金はこれを藩から受けながら学事いっさいを松山が担当していたのであった。

ただし、鈴木要吾著『松山棟庵先生伝』（三二、二七二頁）によると、右は明治三年（一八七〇）のこととされ、前記の松山、浜口両名宛福沢書簡も明治二年と解するのは誤りで、だいいち松山が紀州へ帰ったのが二年十月ごろとしるされている。けれども、内容から推してたしかに明治元年のものと断定される十二月八日付の前掲の山口良蔵宛福沢書簡に、明らかに

「先日松山義帰国」云々の文言が見られるし、また長く慶応義塾に教頭の地位にあって重きをなしていた門野幾之進の懐旧談（『門野幾之進先生事蹟・文集』、一〇八頁）にも、同二年四月に門野が入学した当時、松山は帰国していて塾にいなかったと語られているなどのことからすれば、ここにいう「明治二年」が誤りとは必ずしもいいきれまい。

それから、浜口は梧陵と号し、福沢自身が明治十七年（一八八四）にしるしているところによれば、「紀州有田郡ノ豪家、家ハ郷士ナレドモ、明治ノ初年ニ紀藩ニテ津田又太郎（今ノ名ハ出ト云）ガ大参事、浜口ガ小参事ナリシ。又浜口ノ家ハ百余年前ヨリ下総ノ銚子港ニ醤油ヲ製シ、唯今ニテモ毎年四、五千石出来、富有ノ名アリ。此人ハ少年ノ時ヨリ文ニ志シ、洋書コソ読マザレドモ博識ノ士ナリ。」（『福沢諭吉全集』第十七巻、六七一頁）といわれる人物である。松山の紹介で福沢と知りあい、たとえば明治二年五月二十三日付の山口良蔵宛福沢書簡中、「紀公も御着府。浜口氏えは毎度面会いたし候。」（同書、七五頁）と報じられているほどの親交ぶりで、あるいは、さきに浜口が出府の際に不快をおこしたことについての見舞かたがた、手製の醤油をおくられたことへの礼を述べた同年四月八日付の福沢書簡などもある（同書、七二頁）。

同じく七月九日付ではまた、「一昨日は御来訪被下候よしの処、適々外出中、失敬且残念奉存候。今日は一寸参上の積の処、朝より客来にて不能其義、御出立も近より候義に可有之、明日にても拝趨可仕候。」（同書、七八頁）としるして、かねて注文のあった英文典百二十部、代金三拾両のところ品物で三割引して百五十六部納入することを申し送っている。この英文典は「慶応義塾読本」として明治二年五月に翻刻されたもので、浜口はこれを共立学舎の教科書に使用したのであろう。

このように、福沢を共立学舎に招こうとする企ては、福沢とすれば、当時しきりに明治政府の召命をうけながらそれをことわりつづけていた折から、うっかり紀州の招きに応じたりしては「如何様の事件可差起も難計」、赴任は出来かねるけれども、在京のままで能う限りの助力はしようということで、福沢の和歌山赴任は実現にはいたらなかったものの、紀州

と福沢との関係はいっそう密度を深め、それだけ慶応義塾における同藩の勢力の増大のほどもしのばれるものといえよう。

五

以上のほか、先述の明治元年十二月八日付山口宛福沢書簡の追書には新刊の『窮理図解』を「先日紀洲様へは相廻し申候。」などとあり、藩主との接触も当然うかがわれ、紀州藩と福沢との関係のなみなみならぬことが知られるばかりか、廃藩後もそのような関係は依然つづいた。

『福沢諭吉全集』第二十巻（一六二―三頁）を見ると、明治十年二月二十三日付の「旧紀州藩士の為の義田結社の趣旨」と題する一文が、「福沢は旧紀州藩の要人等と親交があったから、その依頼によってその旧藩主に代って書いたものであろう。」との注記をほどこして収められているし、幕末に入学してつとに福沢から「頼母しき品物」（前掲の山口宛書簡参照）といわれた小泉信吉の海外留学についても、紀州徳川家の家職三浦久太郎（のち、安）に福沢が周旋している事実などが同全集第十七巻所収の福沢書簡によってうかがえる（明治七年九月二十一日付、同九年？七月二十日付、十年二月三日付等参照）。さらに、福沢が明治二十四年（一八九一）、有名な「瘠我慢の話」を草した折、はじめ二、三の親友だけにしか見せなかったというが、その一人は紀州家の徳川頼倫であったと伝えられ（『福沢諭吉伝』第一巻、七二四頁）、また慶応義塾が創立五十年を記念して、明治三十九年（一九〇六）に図書館建設を企てた際、これは福沢の死後のことであったが、やはり右の頼倫から多額の寄付がよせられたこともある（『慶応義塾百年史』中巻前、五七五―六頁）。

さて、慶応義塾は廃藩置県の年、明治四年（一八七一）に三田に移転し、その初期の教員二十八名中、紀州出身者としては和田義郎、森下岩楠の二名があげられているにすぎないが（『慶応義塾五十年史』、四五九頁）、別に草郷清四郎は塾監として

威勢をふるっていたし（『福沢諭吉全集』第十七巻、一一二頁所収の明治四年一月ごろのものと思われる山口良蔵宛福沢書簡には、「草郷も速に参り、此度は塾の俗務取締を托し申候。小泉は南校え入仕、職の為めいたし方無之」云々と報じられている。）、実はこのころからことに主要な職務に紀州出身者がぞくぞくと就任しているのである。

すなわち、明治六年（一八七三）十月には慶応義塾に医学所が設けられたが、同十三年六月に同校が廃校されるまで同校校長としてこれを主宰していたのは松山棟庵であり、その開校の動機もまた本来は紀州出身の前田政四郎の希望に端を発するものといわれる（『慶応義塾百年史』上巻、四八三―五〇六頁参照）。ついで、同七年（一八七四）一月には現在の幼稚舎の起源となった和田塾が発足したが、これもほかならぬ紀州出身の和田義郎が福沢の意を体して始めたもので、和田は同二十五年（一八九二）一月に急逝するまで同舎長の任にあった（同書、五四四―五五八頁参照）。そればかりか、明治九年（一八七六）九月から同十年十二月までは森下岩楠が塾長をつとめているし、下って同二十年（一八八七）十月には大蔵省の主税官であった小泉信吉が招かれて総長に就任し、二十二年（一八八九）十月に引きつづき塾長に選ばれて、二十三年十月まで在任、とりわけ鎌田栄吉のごときは同三十一年（一八九八）四月から大正十一年（一九二二）六月までおよそ四半世紀にわたって塾長に任じた（同書付録、「歴代塾長」の項参照）。

このような実情を見れば、紀州が慶応義塾の藩閥の一つにあげられたというのも、さこそと納得されるであろう。同様に、それはまた紀州側にあっても当然いえるわけで、まえにもちょっとふれたが、これも紀州出身の海南下村宏は大正十三年（一九二四）に『南紀人材論』なる著書を公にし、そのなかに、慶応義塾についての項をかかげて、「現時の実業界に覇を唱ふるものは三田である。慶応義塾である。一ツ橋の商業学校も一歩を譲らねばならぬと思ふ。兎にも角にも歴史が古い。今日在野の巨頭は官界の天降りを除けば殆んど三田系統に属して居る。而して我和歌山県はこの三田に最も古くより浅からぬ宿縁を持って居った。」（二一一頁）と述べ、維新の際における紀州の新智識の一半は陸軍に入り、一半は慶応義

塾に学んだとしるして、義塾への入学者を列記し、次のように結んでいる。

兎にも角にも寂寥々たる実業界に於ける我県人も、猶慶応義塾によりて幾分の面目を存するものあるは、上表を見ても分かる。小田原電鉄社長の草郷清四郎君、興信所長の森下岩楠君、三井の名古屋支店長谷井保君（注、保の実弟矢田績の誤りか。保は日本郵船の神戸支店長）、郵船の孟買支店長楠本武俊君、鉄道時報社の木下立安君、帝国鉱泉の中谷整治君の如き其例である。若し故吉川泰次郎・小泉信吉・中井芳楠の諸君が猶ほ健在であったなら、今少しは実業界に於ても生色があった事であらうと思ふ。（二一六頁）

同文末尾の吉川は共立学舎の教職を退いてのちも、はじめは主として教員生活をおくり、弘前の東奥義塾に赴任したり、愛知・宮城等で初期の師範学校長をつとめたりしたが、後年は日本郵船会社の社長としてその大会社たるの基を築き、小泉は慶応義塾長辞任後、日本銀行に入り、それからかつて創立時において副頭取に推されたことのある正金銀行にもどって支配人となった。また、中井は同じく正金銀行に勤務し、ロンドン支店長として抜群の手腕をかわれ、没後その記念に寄付された図書費による記念文庫が現在も慶応義塾図書館に設けられている。ただ、いずれも四十代のほぼ半ばか五十代に手のとどいたばかりで世を去り、下村はこのように比較的に早い時期の出身者に若くして死んだものの多いことを遺憾とし、そのわりにあとのつづかないのを歎じて、同書執筆の当時、三十余名の慶応義塾評議員中、紀州人は鎌田栄吉だけであり、教授陣には「故小泉信吉君の令息が一人大学より留学せられているのみ」云々（二一三頁）ともいっている。

それでも、鎌田は歴代の塾長中でも前述のとおり最長の在任期間を記録し、また理事をつとめ、評議員会議長に推され、塾外でも文部大臣の経験はあり、枢密顧問官にも任じられるなど、一人といえども万人の重きをなしていたし、「故小泉信吉君の令息」信三はその随筆「父母の故郷」にしるされているとおり、紀州人というには紀州になじみのほとんどないものかも知れないが、これまた後年、もっぱら名塾長とうたわれたうえ、あたかも福沢の衣鉢をつぐものとして世に高く

評価されていることは贅言を要しまい。いうまでもなく、文化勲章の受章者でもある。

そして、下村はさらに、慶応義塾の創立以来明治二十七年（一八九四）以前における卒業生総数一千五百十五名（正しくは大学部八十六名を含めて一千五百七十五名）中、和歌山県人は六十三名で、二十四人につき一人の比率なのに、同二十八年（一八九五）以降四十四年（一九一一）にいたるまでの卒業生数一千六百四十九名（正しくは大学部一千二百三名にその他を加えて一千六百五十一名）に対しては、和歌山県人が二十名にすぎず、その比率は八十二人につき一人と激減していると指摘しているが、数だけで一概に消長はいいきれまい。

慶応義塾に学んだ紀州人にして名を成した人びとは、すでに一言したもののほかにも、もとより決して少なくなく、古くは明治五年入学の高等師範学校教授三宅米吉、外交官として活躍した同二十八年入学の本多熊太郎、同四十三年入学の文化勲章作家佐藤春夫等々各分野にそれぞれ列挙にいとまがあるまい。慶応義塾大学名誉教授のなかにも現在、西本辰之助、松本芳夫の両名がいる。

これを要するに、福沢諭吉は親友山口良蔵を通じて紀州藩との関係を結び、その間に、将来の日本をになうべき人材の養成をひたすら念じて、そのための一つの恰好な実践の場をそこに求め、それなりの効果を十分にあげたものといってよかろう。したがって、くりかえしていうけれども、その意味では、縁さえあれば、それは必ずしも紀州でなければならなかったわけではないと思われるが、それにしても、福沢が松山棟庵に宛てた明治二年二月二日付の書簡のなかに、紀州人を評して、「僕敢て貴国へ対しゴマをスルにあらざれども、これまで諸国の人に交るに、人気の隠にして自ら自由寛大の風を存し候は紀人に限り候様有之候。」（前掲書、六三頁）といっているのは、福沢と紀州の結びつきに単なる偶然や方便だけでないものを感ぜしめずにおくまい。そして、結果的にみても、この結びつきは、ひとり慶応義塾にとってのみならず、わが国の発展についても少なからぬ意義があったし、紀州としても得るところが多かったはずである。

おわりにいささか付言をすれば、先述の共立学舎への松山棟庵、吉川泰次郎をはじめ、『慶応義塾百年史』付録（一八〇頁）によると、やはり和歌山の自修学校には明治の初期に吉田政之亟、村井信晴、中井芳楠、谷井保、岸田正、岸幹太郎、鎌田栄吉らの慶応義塾出身の紀州人が相ついで教鞭をとり、二十年代になると坪井仙次郎、手島春治らが和歌山県尋常師範学校に教え、そのほか紀州人ではないが義塾を出て同地の諸学校に赴任したものもしばしばあり、竹村覚著『日本英学発達史』（二二二―三頁）には、廃藩置県に際して兵学寮趾に置かれた県学（共立学舎のことではなかろうか）の英学教師がこれも慶応義塾出身者で、その門から鎌田栄吉や谷井保とともに後年のシェークスピア研究者河島敬蔵などの出ていることがしるされている。こうして、紀州藩と福沢との一つの結びつきから、いっそう大きなひろがりを示し、各方面に人材を輩出してわが国の進運に多少なりとも寄与するにいたったことを思いやると、これはいかにも紀州と福沢、あるいは慶応義塾との関係だけに止まらないことを痛感するのである。まことに慶すべき結びつきであったというべきであろう。

（本稿の要旨はさきに昭和四十四年六月八日、和歌山県新宮市で催された日本英学史研究会第六回大会において、「紀州と慶応義塾」と題し発表したところである。）

追記　本稿印刷中に、目下『福沢諭吉全集』再版のことにたずさわっておられる富田正文氏から、「山口良蔵関係文書」なるものを見せていただく機会を得た。そのなかに、これまでの全集には未収の山口宛福沢書簡七通があって、特に、富田氏の推定では明治二年ごろのものとされる、その一通に、慶応義塾をあげて官有とし、その「義塾を本といたし、天下諸方へ手分け教授も可致と決議相成候事に御座候」というような文言が見られた。明治二年に福沢を紀州に招こうというはなしは、あるいはこのような事情をふまえたうえでのことであったのかとも思われる。一言ここに書きそえておく。